

■川内港(鹿児島県)

川内港は、九州南部の西端、鹿児島県の北西部に位置し、奈良・平安時代には坊ノ津、博多津とともに九州三津の一つとして称され、京都・奈良方面への海上交通の基地として、また唐貿易の重要港として役割を果たしてきました。1970年5月に重要港湾への指定から、2004年にはコンテナ航路の開設、2014年には甑島への高速船の就航、2019年には港湾計画が改訂され、2021年4月には国際物流ターミナル整備事業が新規事業化されるなど、地域経済や産業、地域の振興、離島の生活や観光など振を支える重要な役割を担っており、2020年には重要港湾指定から50周年を迎えたところです。

●連携による地方創生、地域産業の活性化に向けた取り組み

産学官による20～30年後を見据えた川内港長期構想を策定後(2019年9月)、川内港を活性化させるため、鹿児島県北西部では初めてとなる「川内港地域活性化協議会」を官民連携で発足(2019年11月)し、輸出入強化や港利用の企業立地促進など長期構想に基づく港の機能強化を図っています。また、川内港近隣の3自治体(阿久根市、日置市、薩摩川内市)が「薩摩國広域輸出促進協議会」を設立(2020年5月)し広域連携による集荷促進を図っています。ここでは、地元食材の販売をはじめ、観光PRなど海外展開に向けて鹿児島県も合同になり海外輸出プロモーションを共同で開催しています。これに並行して、林業関係者を中心とした「次世代型林産品輸出システム検討会」を官民連携で発足(2019年10月)し、川内港背後の林産品輸出拡大に向け、川上から川下まで一体となった物流効率化による輸送コスト削減や継続的・安定的な木材供給体制の構築など取り組みを実施しています。川内港の近隣には、九州新幹線、南九州西回り自動車道のインフラ整備も進んでおり、川内港の利用促進に向けた取り組みを官民一体となって展開していることから、人流・物流が拡大され、雇用の創出や地域産業の活性化が進展しているところです。

●南九州の産業を支える国際物流拠点としての更なる飛躍に期待

2014年以降よりコンテナ船による原木輸出が増加し、近年では貨物船による原木輸出も行われています。港湾の背後地域は主伐期を迎える木材供給量が豊富で、急増する中国等の木材需要に対応できると考えており、更なる木材輸出の増加が見込まれています。そこで、大型船による効率的かつ経済的な木材輸出を行うための岸壁整備に向けて、港湾計画の改訂(2019年)を行い、2021年4月には国際物流ターミナル整備事業が事業化されました。

●高速船の就航にあわせ地域一体となった「みなとまち」づくりから「みなとオアシス薩摩川内」の誕生

2014年の高速船の就航にあわせて高速船ターミナルも開設し、島民や観光客の交通拠点となっています。また、2016年には高速船ターミナルに隣接した場所に、地元の農林水産物、加工品の直売所や食を楽しむことの出来る「川内とれたて市場」がオープンし、月間延べ9千人以上が来訪する「地域の賑わいの創出の場」となっています。近年では、地域住民と一体となった取り組みもあり、本土と甑島を合わせて、2020年にみなとオアシスへの登録が行われたところです。このように、市民、地元企業、港湾関係者、行政が一体

となって、みなとの元気を創出する取り組みを進めている川内港をポート・オブ・ザ・イヤー2021に推薦いたします。